

令和八年度

入学試験問題

(一般選抜前期)(一月二十七日)

愛知学泉大学

「国語」

時間 六十分

注意事項

- 一 受験票を机の右上に提示すること。
- 二 試験開始後二十分以上遅刻したときは受験できない。
- 三 試験終了まで退室はできない。
- 四 この科目の試験時間は十一時三〇分から十二時三〇分までである。
- 五 試験開始・試験終了は、試験監督者の「始め」・「止め」の合図による。
- 六 問題冊子・解答用紙が配付されても、「始め」の合図があるまでは見てはならない。
- 七 **解答用紙に受験番号、氏名を正確に記入すること。**
- 八 解答は、すべて**解答用紙**に鉛筆で正確に記入すること。
- 九 質問があるときは、黙って手を上げること。
- 十 用便その他気分が悪くなった場合等は、黙って手を上げ、試験監督者に申し出ること。
- 十一 試験終了の「止め」の合図があったら、ただちに筆記を止め、試験監督者の指示があるまで席を立たないこと。
- 十二 問題冊子は、各自持ち帰ること。

一 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

ソウル・フード (soul food) という言葉があります。アメリカ合衆国 (以下、アメリカ) では、アフリカ系アメリカ人の伝統的料理の総称として使われます。代表的な食材は、豚肉、鶏肉、なまず、長米、そして野菜などで、さまざまに創意工夫されます。具体的料理法はソウル・フードの料理本にあたれば事足りります。

しかし、多くの場合、ソウル・フードの料理本は、次の問いにはなかなか満足はいく説明を与えてくれません。すなわち、アフリカ系アメリカ人の伝統的料理はなぜ「ソウル (魂)」なのか。彼ら彼女らにとって「ソウルを込める」とはどういう意味を持つのか。別の形の問いにしてみましよう。アフリカ系アメリカ人の伝統的料理が「ソウル」と呼ばれるに足る理由はどこにあるのか。この理由を知るには、少し立ち入った歴史的考察が必要になります。以下では、まず、かつてアメリカ南部で行われていた奴隷制度と食との関係を見ることで、「ソウルを込める」ことの意味を探ります。次に、ソウル・フードという語がいつ頃登場し、その社会的背景は何であったのかを整理します。なお、ここからは人種関係の歴史について書きますので、「白人／黒人」という用語を使用します。

アメリカ南部の奴隷制度は、綿花<sup>a</sup> サイバイ<sup>a</sup>を中心拡大し、南北戦争の結果、一八六五年に廃止されるまで続きます。白人プランター (奴隷を所有する農園主) は、労働力を黒人奴隷に頼ります。黒人奴隷人口は、一八六〇年までに四百万人に達しました。南部の奴隷制度については、『アンクル・トムの小屋』『ルーツ』『二イヤーズ・ア・スレイブ』など、小説や<sup>b</sup> 自叙伝や映画などもあり、知っている方も多いでしょう。重要なポイントは、白人プランターがどのように奴隷を管理したかです。

州ごとに多少の違いはありましたが、南部諸州は「奴隷法」を定めます。奴隷法は、奴隷を人間ではなく所有者の財産と規定しました。したがって、奴隷には財産所有の権利や契約を結ぶ権利、<sup>c</sup> 訴訟<sup>c</sup>を起す権利、法的に結婚する権利など、人間としての権利は一切ありません。奴隷はまた、読み書きを習うこと、許可証を持たず居住区外に出ること、白人の臨席なしに五人以上の奴隷が集会すること、アフリカの歌やダンスや呪術的行為を行うことなども禁止されました。これに対し、奴隷の中には、自由を求め逃亡を<sup>d</sup> クワダテル<sup>d</sup>者もいました。しかし、失敗すれば、鞭打ちにあう、指を切断される、烙印を押される、別のプランテーションに売られるなどの処罰が待っています。

このように、奴隷法からだけでも、奴隷制は黒人に対する徹底した非人間化と家族破壊の試みであったと想像することができます。そのため、黒人奴隷にとっての中心的問いは、いかにして生き残り、かつ自分たちの「人間性」を肯定し「コミュニティ意識」を保つことができるかでした。それを可能にしたものの一つが、実に「食」だったのです。どういうことでしょうか。

奴隷の食には三つの供給源がありました。第一は、白人主人からの配給です。配給された食材は、コーン、豚肉、サツマイモ、野菜類、果物類でした。第二は、奴隷自身が菜園を所有することを許可される場合があります。ここでは、奴隷自身が小動物を飼育し、野菜類を栽培しました。第三は、採集、狩猟、魚釣りなどです。ただし、第二と第三は、すべての奴隷に当てはまらなかったわけではありません。では、奴隷制下における食が、自由そして「ソウル」とどのように関係していたか考えます。

これらの関係を考えるうえで、シドニー・W・ミンツという人類学者が『アフリカン・アメリカン文化の誕生』の中で極めて示唆に富む指摘をしています。すなわち、「<sup>①</sup>支配者側は奴隷制を維持しながら、一方では奴隷の人間性を認めてしまった」と言うのです。

かれら「奴隷」はそこで入手できる物だけを材料にして、自発的に新しい「食」を創造したんだよ。開けた心と創意がなければできないことだ。

奴隷法によれば、黒人奴隷は人間ではなく白人主人の所有物、財産でした。ところが、人間にしかできない行為があります。料理をするという行為が、まさにそれです。

「食」を創造したとき、奴隷は人間としての、人間にしかない技術を使った。「中略」味わう、比較する、好みを生かすなどの、人間的な能力（生産、処理、調理）を發揮していた。

黒人奴隷は、日の出から日没まで野良仕事をしている間、白人主人や白人監督から、およそ人間性と呼べるものの一切を否定されてきました。その中で、奴隷が自分たちは人間であると肯定できる瞬間、それが料理するという行為に他なりませんでした。この文脈を踏まえるとき、たとえ食材は限られていたとしても、黒人奴隷が「食の創造」にどれほど情熱を込めようとしたか、喜びを込めようとしたか、人間としての誇りを込めようとしたかを理解することができるとはできないでしょうか。所有物、財産と、<sup>e</sup>キティされる状況下であって、黒人奴隷がなお自分たちの「i」を肯定することができた理由は、実に「食の創造」という行為のうちにあったのです。ミンツは続けます。

<sup>②</sup>魂から湧きでた材料を、奴隷は食材に加え調理した。「食」は魂のこもった想像力を注ぎ込む容器だった。もし、料理に使われた素材が汗水ながす苦しい労働から得られたものでなかったら、ソウル・フードは生まれなかつただろう。それだけではない。ソウル・フードには誇りと、歓喜と、食べ物大切に思う心、まじりけのない愛が含まれている。

そして、黒人奴隷は、白人主人の都合によって家族や仲間がいつでも解体離散させられる危険性に直面していました。この点を踏まえると、黒人奴隷にとって創意工夫して作った料理を家族や仲間と一緒に食べるという行為がどれほど重視されていたのかも、想像できると思います。

<sup>③</sup>食は黒人奴隷にとって「コミュニティ意識」を保つための欠くべからざる手段だったのです。

さらに、興味深いことに、黒人奴隷が作った料理は、ii たちの味覚にも影響を与えます。

黒人奴隷のなかには家内奴隷と呼ばれる奴隷がおり、iiとその家族のために料理を準備していたからです。黒人の食と白人の食は、部分的に重なっていたのでした。ミンツはこう言います。

奴隷は食に対する好みを持っていた。そればかりか、かれらの好みは支配者の好みにも影響を与えるようになる。奴隷制の社会で、プランター階層がいつしか喜んで口にするようになった「食」は、奴隷から教えてもらったものだよ。

このように見てくると、アフリカ系アメリカ人の伝統的料理、すなわち奴隷制時代に黒人奴隷が食した料理は、ソウル・フードと呼ばれるに足る理由があるといえるのではないのでしょうか。ソウル・フードは、元来は軽量カップや時計などを使わず、五感すべてを働かせ、愛情、心、魂を込めて作る料理とされます。また、「家庭の味」や「一家団欒」を想起させる料理とされます。奴隷制と食との関係を見てきた今、そのように説明される理由が深い意味を帯びて理解できるのではないのでしょうか。

(黒崎 真「アメリカ黒人のソウル・フード」)

※作題の都合上、本文の一部表記を改めた。

問一 波線部 a、e の片仮名を漢字に、漢字を平仮名にそれぞれ改めよ。送り仮名が必要な場合は送り仮名を平仮名で記せ。

問二 二重傍線部「示唆に富む」の意味として最適なものを次のア～オから一つ選んで、記号で答えよ。

- ア エビデンスは乏しいが、経験に基づいた忠告をするようなこと。
- イ 読み手に知識を分かりやすく具体的に説明をしていること。
- ウ 誤りや偏見が少なく、納得しやすい内容であること。
- エ 気づきを与えるような考察がたくさん含まれていること。
- オ 科学的根拠に基づいて客観的に証明されていること。

問三 傍線部①「支配者側は奴隷制を維持しながら、一方では奴隷の人間性を認めてしまった」とは、どういうことか。本文の言葉を用いて五十字以内で説明せよ。

問四 空欄 i、ii に入る最適な言葉を、空欄 i は漢字三字、空欄 ii は漢字四字で本文中から抜き出して書け。

問五

傍線部②「魂から湧きでた材料」という表現が象徴している内容として最適なものを次のア～オから一つ選んで、記号で答えよ。

- ア 情熱、誇り、愛情といった奴隷たちの精神性に関わること。
- イ 奴隷が過酷な労働の見返りとして得た物理的対価や所有物のこと。
- ウ アフリカ系アメリカ人に語り継がれる調理技法など文化的な要素のこと。
- エ 長年の伝統に基づく儀式や祈りなどの形式的な行為のこと。
- オ 被支配者として白人主人に忠誠を誓う従順な心のこと。

問六

傍線部③「食は黒人奴隷にとって『コミュニティ意識』を保つための欠くべからざる手段だった」のはなぜか。その理由を六十五字以内で説明せよ。

問七

アフリカ系アメリカ人の伝統的料理が「ソウル・フード」と呼ばれるようになった背景として、本文の論旨に最も即しているものを、次のア～オから一つ選び、記号で答えよ。

- ア 制約の多い奴隷制下においても、愛情、心、魂を込めて作る料理を通して白人の嗜好に影響を与え、文化的優越性を主張することが実現したから。
- イ 強制的に奪われた文化を再現する中で、アフリカの食文化への郷愁と誇りを託し、その継承を意識的に図った結果として、料理に魂が宿ったから。
- ウ 人間性を否定される過酷な環境下でも、創造的な料理と家族や仲間との食事の共有を通して、自らの人間としての尊厳と絆を築く営みであったから。
- エ 奴隷が作る魂のこもった料理が、白人主人の味覚に浸透し、気に入られることで、料理人として認められ、アフリカ系アメリカ人の地位が向上したから。
- オ 奴隷に許されたわずかな自由時間を用いて体力と技術を養う生活を構築し、生きる希望を見出す方法として奴隷たちに広く伝わったから。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

神田の秤屋はかりに奉公する仙吉（小僧）は、番頭たちの会話からすしが美味しいものだと知る。しかし、奉公人の仙吉には自由に使える金はない。そこで、使いに行く時にもらう電車賃四銭をとっておき、屋台のすしを一つだけ食べようとする。

若い貴族院議員のAは同じ議員仲間のBから、すしの趣味は握るそばから、手づかみで食う屋台のすしでなければわからないというような通つうをしきりに説せつかれた。Aはいつかその立ち食いをやってみようと考えた。そして屋台のうまいというすし屋を教わっておいた。

ある日、日暮れもない時であった。Aは銀座のほうから京橋を渡って、かねて聞いていた屋台のすし屋へ行ってみた。そこにはすでに三人ばかり客が立っていた。彼はちよつと躊躇ちよつちよした。しかし思い切つてのれんをくぐつたが、その立っている人と人の間に割り込む気がしなかったの  
で、彼はしばらくのれんをくぐつたまま、人の後ろに立っていた。

その時不意に横合いから十三四の小僧注2がはいつて来た。小僧はAを押しつけるようにして、彼の前のわずかな空すきへ立つと、五つ六つすしの乗っている前下りの厚い櫻板けやきいたの上をせわしく見回した。

「のり巻きはありませんか」

「ああきょうはできないよ」太つたすし屋あるじの主はすしを握りながら、なおジロジロと小僧を見  
ていた。

小僧は少し思い切つた調子で、<sup>①</sup>こんな事は初めてじゃないというように、勢いよく手を延ばし、  
三つほど並んでいる鮪まぐろのすしの一つをつまんだ。ところが、なぜか小僧は勢いよく延ばしたわり  
にその手をひく時、妙ちよに躊躇ちよつちよした。

「一つ六銭だよ」と主あるじが言った。

小僧は落とすように黙つてそのすしをまた台の上へ置いた。

「二度持ったのを置いちゃあ、しようがねえな」そう言つて主は握つたすしを置くとき引きかえに、  
それを自分の手元へかえた。

小僧は何も言わなかった。小僧はいやな顔をしながら、その場がちよつと動けなくなった。し  
かしすぐある勇気を振るい起こしてのれんの外へ出て行った。

「当今はすしも上がりましたからね。小僧さんにはなかなか食べきれませんよ」主は少し<sup>②</sup>具  
合悪そうにこんな事を言った。そして一つを握り終わると、その空あいた手で今小僧の手をつけた  
すしをキョウに自分の口へ投げ込むようにしてすぐ食ってしまった。

「このあいだ君に教わつたすし屋へ行つてみたよ」

「どうだい」

「なかなかうまくつた。それはそうと、見ていると、皆みんなこういう手つきをして、魚さかなのほうを下  
にして一ペンに口へほうり込むが、あれが通つうなのかい」

「まあ、まぐろは<sup>c</sup>大概ああして食うようだ」

「なぜ魚さかなのほうを下にするのだろう」

「つまり魚が悪かった場合、舌へヒリリと来るのがすぐ知れるからなんだ」

「それを聞くとBの通も少し怪しいもんだな」

Aは笑いだした。

Aはその時小僧の話をした。そして、

「なんだかわいそうだった。どうかしてやりたいような気がしたよ」と言った。

「ごちそうしてやればいいのに。いくらでも、食えるだけ食わしてやると言ったら、さぞ喜んだらう」

「小僧は喜んだらうが、こっちは冷や汗ものだ」

「冷や汗？つまり勇気がないんだ」

「勇気かどうかわからないが、ともかく、<sup>③</sup>そういう勇気はちよつと出せない。すぐいっしょに出てよそでごちそうするなら、まだやれるかもしれないが」

「まあ、それはそんなものだ」とBも賛成した。

Aは幼稚園に通っている自分の小さい子供がだんだん大きくなって行くのを数の上で知りたい気持ちから、風呂場へ小さな体量秤をソナえつける事を思いついた。そしてある日は偶然神田の仙吉のいる店へやって来た。

仙吉はAを知らなかった。しかしAのほうは仙吉を認めた。

店の横の奥へ通ずる三和土(注3)になった所に七つ八つ大きいから小さいのまで荷物秤が順に並んでいる。Aはそのいちばん小さいのを選んだ。停車場や運送屋にある大きな物と全く同じで小さい、そのかわいい秤を妻や子供がさぞ喜ぶことだろうと彼は考えた。

番頭が古風な帳面を手にして、

「お届け先はどちら様でございますか」と言った。

「そう……」とAは仙吉を見ながらちよつと考えて、「その小僧さんは今、手すきかネ？」と言った。

「へえ別に……」

「そんなら少し急ぐから、私といっしょに来てもらえないかネ」

「かしこまりました。では、車へつけてすぐお供をさせましょう」

Aは先日ごちそうできなかった代わり、きょうどこかで小僧にごちそうしてやろうと考えた。

「それからお所とお名前をこれへ一つお願いいたします」金を払うと番頭は別の帳面を出して来てこう言った。

Aはちよつと弱った。秤(はかり)を買う時、その秤の番号といっしょに買い手の住所姓名を書いて渡さねばならぬ規則のある事を彼は知らなかった。名を知らしてからごちそうするのは同様に冷や汗の気がした。しかたなかった。彼は考え考え<sup>④</sup>でたらの番地とでたらの名を書いて渡した。

客はかげんをしてぶらぶらと歩いている。その二三間(注4)後ろから秤を乗せた小さい手車を挽いた仙吉がついて行く。

ある俵宿の前まで来ると、客は仙吉を待たせて中へはいって行った。まもなく秤はしたくのできた宿俵に積み移された。

「では、頼むよ。それから金は先でもらってくれ。その事も名刺に書いてあるから」と言ってお客は出て来た。そして今度は仙吉に向かつて、

「お前も御苦労。お前には何かごちそうしてあげたいからそのへんまでいっしょにおいで」と笑いながら言った。

仙吉はたいへんうまい話のような、少し薄気味悪い話のような気がした。しかしなにしろうれしかった。彼はペコペコと二三度続けざまにお辞儀をした。

そば屋の前も、すし屋の前も、鳥屋の前も通り過ぎてしまった。「どこへ行く気だろう」仙吉は少し不安を感じだした。神田駅の高架線の下をくぐって松屋の横へ出ると、電車通りを越して、横町のある小さいすし屋の前へ来てその客は立ち止まった。

「ちょっと待ってくれ」こう言ってお客だけ中へはいり、仙吉は手車の梶棒をおろして立っていた。まもなく客は出て来た。その後ろから、若い品のいいかみさんが出て来て、

「小僧さん、おはいりなさい」と言った。

「私は先へ帰るから、充分たべておくれ」こう言ってお客は逃げるように急ぎ足で電車通りの方へ行ってしまった。

仙吉はそこで三人前のすしを平らげた。飢えきつたやせ犬が不時の食にありついたかのように彼はがつがつとたちまちの間に平らげてしまった。ほかに客がなく、かみさんがわざとシヨウウジを締め切って行ってくれたので、仙吉は見得も何もなく、食いたいようにしてたらふくに食う事ができた。

茶をさしにきたかみさんに、

「もつと、あがれませんか」と言われると、仙吉は赤くなつて、

「いえ、もう」と下を向いてしまった。そして、せわしく帰りじたくを始めた。

「それじゃあネ、また食べに来てくださいよ。お代はまだたくさんいたたいであるんですからネ」仙吉は黙っていた。

「お前さん、あの旦那とは前からおなじみなの？」

「いえ」

「へえ……」こう言つて、かみさんは、そこへ出て来た主と顔を見合わせた。

「粹な人なんだ。それにしても、小僧さん、また来てくれないと、こつちが困るんだからネ」仙吉は下駄をはきながらただむやみとお辞儀をした。

Aは小僧に別れると追いかけられるような気持ちで電車通りに出ると、そこへちょうど通りかかった辻自動車呼び止めて、すぐBの家へ向かった。

Aは変に寂しい気がした。自分は先の日小僧の気の毒な様子を見て、心から同情した。そして、できる事なら、こうもしてやりたいと考えていた事をきょうは偶然の機会から遂行できたのである。小僧も満足し、自分も満足していいはずだ。人を喜ばす事は悪い事ではない。自分は当然、ある喜びを感じていいわけだ。ところが、どうだろう、この変に寂しい、いやな気持ちは。なぜ

だろう。何から来るのだろうか。ちょうどそれは人知れず悪い事をしたあとの気持ちに似通っている。もしかしたら、自分のした事が善事だという変な意識があつて、それをほんとうの心から批判され、裏切られ、あざけられていたのが、こうした寂しい感じで感ぜられるのかしら？もう少しした事を小さく、気楽に考えていればなんでもないのかもしれない。自分は知らず知らずこだわっているのだ。しかしとにかく恥ずべき事を行なったというのではない。少なくとも、不快な感じが残らなくてもよさそうなものだ、と彼は考えた。

(志賀 直哉「小僧の神様」)

※作題の都合上、本文の一部表記を改めた。

(注1) 貴族院議員：明治憲法下の日本における帝国議會を構成する上院の議員。

(注2) 小僧：商店で雇われている年少の男店員。

(注3) 三和土：土に石灰と苦汁を混ぜて仕上げた玄関などの土間。

(注4) 二三間：一間は、約一・八二メートル。家の柱と柱の間の長さ。

(注5) 俥宿：人力車の停泊地。

(注6) 辻自動車：タクシーの旧称。

問一 波線部 a～e の片仮名は漢字に、漢字は平仮名に改めよ。

問二 二重傍線部「見得」の意味として最適なものを次のア～オから一つ選んで、記号で答えよ。

- ア 人前でよく見せようとして気取ること。
- イ 相手の反応をうかがって行動すること。
- ウ 物事を冷静に判断する考え方。
- エ 自分の利益や損失を基準に行動すること。
- オ 本心を隠して礼儀正しくふるまうこと。

問三 本文は志賀直哉の作品であるが、志賀直哉の作品を次のア～オから一つ選んで、記号で答えよ。

- ア 田舎教師
- イ 暗夜行路
- ウ 父帰る
- エ 破戒
- オ 武蔵野

問四 傍線部①「こんな事は初めてじゃないというように、勢いよく手を延ばし、三つほど並んでいる鮪まぐろのすしの一つをつまんだ」とあるが、小僧のどのような思いがそうした振る舞いになったと考えられるか。その思いを二十五字以内で記せ。

問五 傍線部②「具合悪そうにこんな事を言った」とあるが、この時の主の<sup>あるじ</sup>気持ちはどのようなものか。最適なものを次のア～オから一つ選んで、記号で答えよ。

- ア 売り物にならなくなったすしを、自分で食べるはめになったことを嘆いている。
- イ 他の客の前で恥をかかせてしまったことを、小僧に謝りたいと思っている。
- ウ 客の手前、小僧がすしを諦めた様子に若干の後ろめたさや気まずさを感じている。
- エ 見知らぬ子どもの冷やかしからあつて、面倒なことを避けたいと考えている。
- オ 屋台の雰囲気壊されてしまったことに、不愉快さを隠しきれずにいる。

問六 傍線部③「そういう勇氣」とあるが、ここでいう「勇氣」と同じ類のものは次のうちのどれか。最適なものを次のア～オから一つ選んで、記号で答えよ。

- ア 外出先で友達が財布を落とした時に、快く金を貸してあげる勇氣。
- イ 学校で先輩から嫌なことを頼まれた時に、はっきりと断る勇氣。
- ウ 面接で自分が詳しくないことを聞かれてもためらわずに答える勇氣。
- エ 電車の中で、皆が知らないふりをして中、他人に席を譲る勇氣。
- オ 会議の大勢の出席者の中で、自分の考えを臆せずに述べる勇氣。

問七 傍線部④「でたらめの番地とでたらめの名を書いて渡した」とあるが、それはなぜか。その理由を四十五字以内で記せ。

問八 傍線部⑤「偶然の機会から遂行できた」行いについて、「A」はどのように考えているか。最適なものを次のア～オから一つ選んで、記号で答えよ。

- ア 一方的であっても、相手を思いやる気持ちによる行為は価値があるので、小僧には善意として受け取られていると考えている。
- イ 相手のことを思っている行動であっても、自己満足や達成感に酔っているのであれば、相手にとっては迷惑だっただろうと後悔している。
- ウ 善意と自己満足は方向性も目的も異なる概念であり、一つの行為にこの二つが同時に宿ることはあり得ないことだと信じている。
- エ 裕福な者が社会的弱者への施しを与える行為は、優越感によるものに過ぎず、とても褒められる行為とは言えないと考えている。
- オ 善事を行うこと自体はよいことだが、それをした自分をどこかで誇らしく思うような気持ちがあることに引っ掛かりを覚えている。

三 次の新聞記事を読んで、後の問いに答えよ。

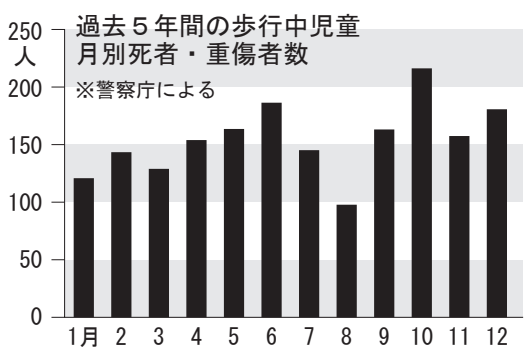
二〇二〇～二四年の五年間に全国で発生した歩行中の交通事故の死傷者数（軽傷を含む）は、全年齢のうち七歳が三四三六人で最多だったことが、警察庁の統計で分かった。小学一、二年生に該当する。坂井学国家公安委員長は二七日の定例記者会見で「この時期は新入生が慣れない道を登下校するため、いつも以上に歩行者の保護に努めていただきたい」とドライバーらに訴えた。

交通安全の知識や経験が少ないことが最多の背景にあるとみられる。四月六日から始まる春の全国交通安全運動を前に同庁が統計を発表した。

六歳以上十二歳以下の児童の死者・重傷者数は一八七五人。月別では通学が始まった四～六月にかけて増加していた。夏休み明けの九月から再び増え、十月の二一八人が最多だった。下校時が最も多く、四八四人と二五・八%を占めた。集団登校があり、保護者や地域住民の見守り活動も多い登校時の二倍以上だった。

（二〇二五・三・二八 『中日新聞』朝刊）

※本文中の算用数字は漢数字に改めた。



問一 二〇二〇～二四年の五年間に全国で発生した歩行中児童の死者・重傷者数が多い時期はいつか。次のア～エから一つ選んで、記号で答えよ。

ア 一～三月    イ 四～六月    ウ 七～九月    エ 十～十二月

問二 歩行中児童の交通事故の死者・重傷者数について、この新聞記事から読み取れることとして、次の①～⑤の適切なものには○を、適切でないものには×をそれぞれ書け。

- ① 歩行中の交通事故による死者数が最も多いのは、七歳である。
- ② 月別で見ると、死者・重傷者数が多いのは十月であり、二〇〇人以上だった。
- ③ 月別で見ると、九月の死者・重傷者数が二番目に多く、一五〇人以上だった。
- ④ 集団登校を行っている地区は、事故の発生件数が少ない。
- ⑤ どの月も七〇人以上の死者・重傷者がいる。

